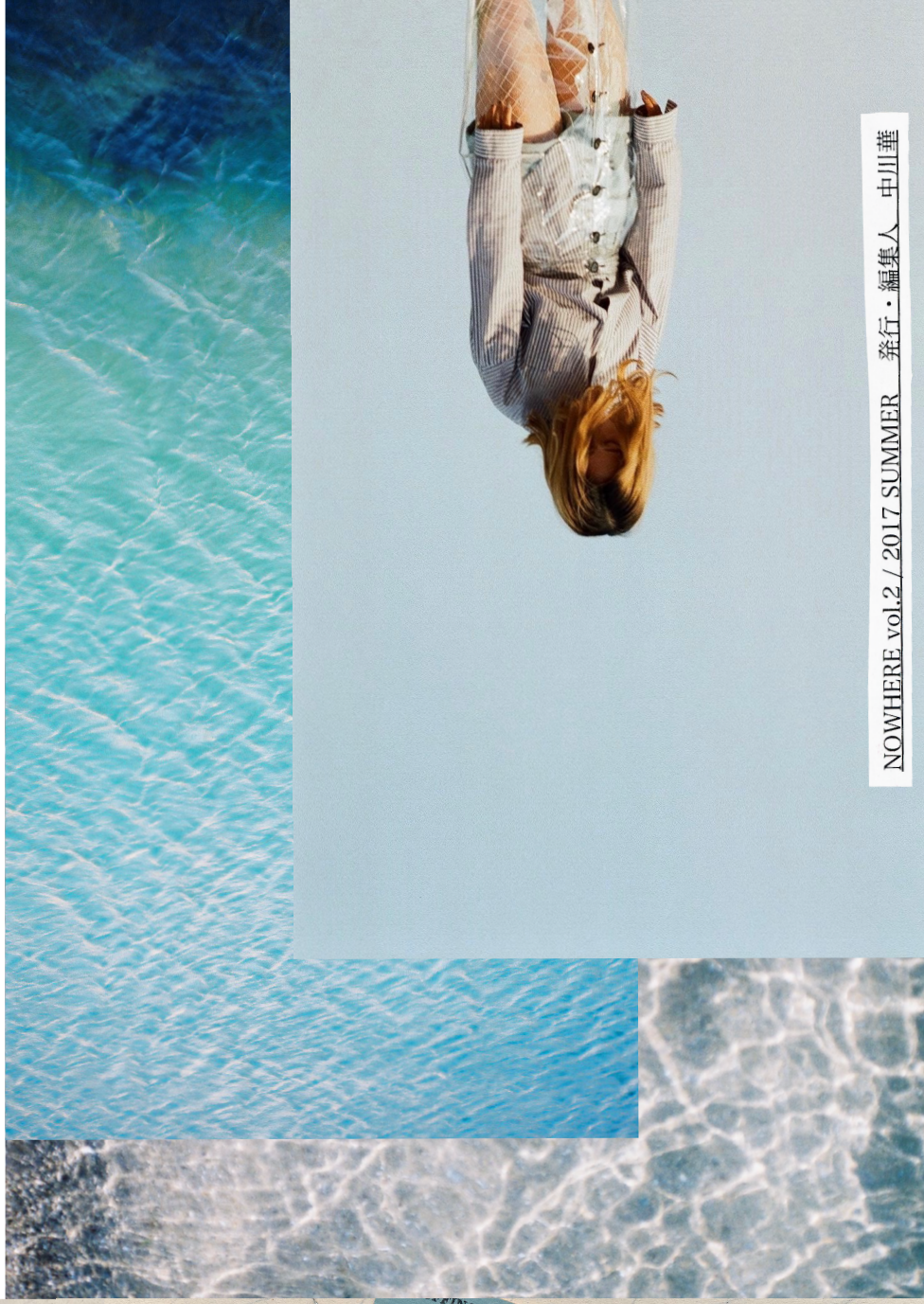
NOWHERE

VOL.2

自然とファッション



NOWHERE vol.2 / 2017 SUMMER　発行・編集人　中川華

地面に影がうつるように、
海には空がうつっている。
光によって。
空が、海が、光が、溶け合っている。

海辺に座って、波の音に耳を傾けながら水平線を眺めていると、
見ている景色、聞こえてくる音、肌で感じる風や温度、その全てが混じり合って、
ふっと自分の存在がわからなくなる瞬間がある。

ヒマラヤ街道でみた青空は直視できないほどに眩しく、沁みるほどに澄んでいた。
高度が上がり空に近づくほど、その青は深く、濃くなる。
一緒に歩いていたシェルパ族の友人は、最期は山がいいと言った。
普段ならそんなのやめて、と即座に返すがその時は何も言えなかった。
青すぎる空を見上げているとわかる気がした。
神様の近くにいれるし、すっごい幸せなんだよ、と友人は笑顔で言った。
さみしいや、悲しいを遥かに通り越した、神聖なところ。
全てを捧げてしまうことに恐れより美しさを感じるような。

青は、つめたいようでいて、どこかあたたかい。
まだ見たことのない世界へ、弾む気持ちだけを胸に踏み出して行くときの感覚にどこか似ている。

ブルー・ブルー

愛しのファッション／着ること、愛情を繋ぐこと

着る。imi

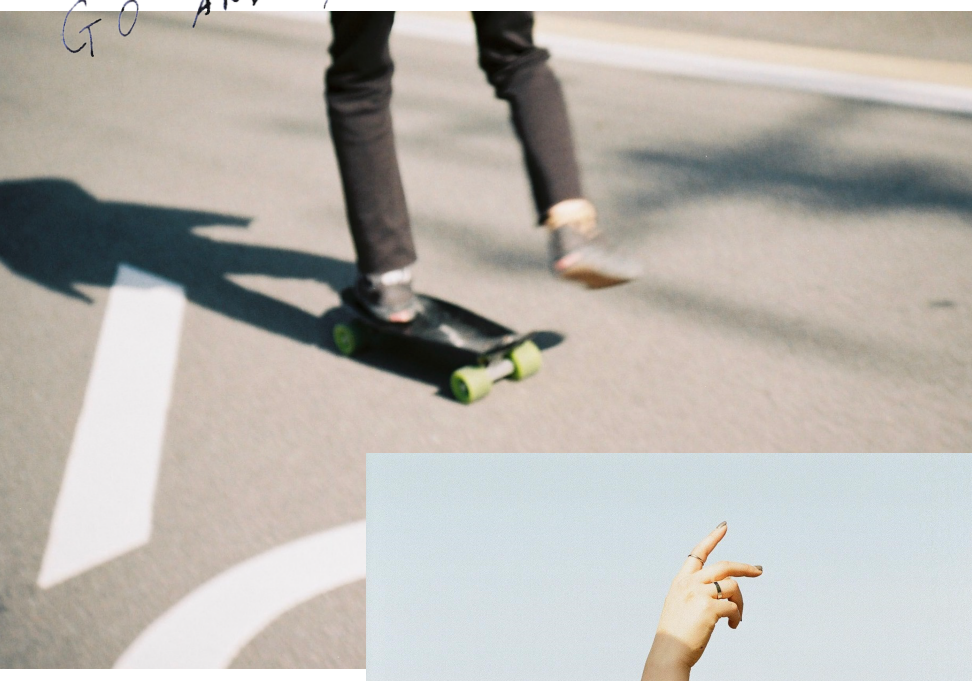
imi。アイヌ語で「着る」を意味する。
アイヌの民族衣装にはじめて触れた時、そのしなやかさに驚いた。
100 年以上も前に着られていた日常着で、オヒョウという北海道にしか自生しない樹の繊維から作られたものだった。本来なら樹の繊維というだけあり、かなりのコシがあるはずだが、生地は少しばかり薄くなり、繊維の角は取れさらりとしていた。羽織ってみると、肌にそっと馴染むような柔らかさだ。短くて 10 年だろうか。相当長い間着続けないとこのような状態にはならない。裏返してみてさらに驚く。裾には色とりどりのハギレがつぎはぎされていたのだ。表から見てもわからないその縫い目は健気で、大切に繕いながら着続けられてきたことを物語っているようだった。

クローゼットにある全ての服を永遠に着続ける、ということは難しい。けれども時を経ても、自分の手元に大切な一枚があるということは、とても美しいことだと思う。
糸を紡ぎ、織り、もしくは編み、パターンをひき、裁断し、縫い合わせる。そうして出来上がったお気に入りの服を大切に着続ける。
こうした民族衣装に強く心惹かれるのは、そんな過程に、縫い目や直して着続けた痕跡に、繋がれてきた確かな愛情を感じるからだと思う。
大切な人を想い、縫われた服を、大切に着ていくこと。どんな国や時代の服でもその一枚にかけられた愛情は感じることができるし、人が着ることで服が生きてきたことを教えてくれる。

kem ruoka　a=sikkotesu　針の縫いあとを見つめる

アイヌ族の年長者は、かつてその歴史や神話、喜びや憤りを、文字を用いず、語ることで年少者へ伝えていた。物語と同じように、手仕事もまた、母から娘、孫娘へとその技術は受け継がれてきた。
文様の施された木綿衣が多く作られるようになったのは交易で古着などが多く手に入るようになった明治終わりから大正のはじめ頃だ。
文様は魔除けの意味をもつと言われ、衣服の襟元や裾、背中などから悪い霊が入り込まないようにと女性たちは愛する人や家族を守りたい一心で文様を施したという。

GO AND SEE!!



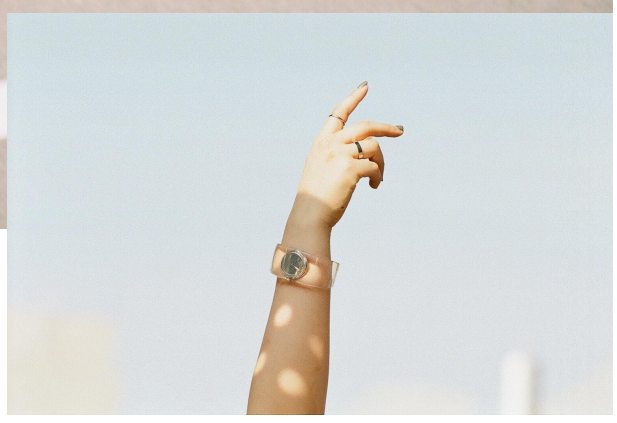


PHOTO AND TEXT BY

中川 華 / Nakagawa Hana

Page:087km.com　Instagram:087km
Mail: yuzunakahana@gmail.com　Phone:070-2323-0449

FAVORITE

MY BLUE "THREE"

OSUSUME "BLUE"

DON'T THINK, FEEL!

BY BRUCE LEE

3

MOVIE　LE GRAND BELU / グラン・ブルー

MUSIC　THE BLUE HEARTS / 青空

BOOK　岡本太郎 / 強く生きる言葉

青い空も、青い海も、手を伸ばせばとどきそうなのにその青を掴むことはできない。ただ、私たちが生きる世界を青がつつみこむ瞬間はどこまでも美しく、確かに存在している。